

白滝鉱山閉山後の地域変遷と地域再生の取り組み ——高知県大川村・朝倉慧の聞き書き——

関 耕 平*

The Closure of the Mine and Regional Regeneration :
A Case Study of Okawa-mura, Kochi and Shirataki-Mine

Kohei SEKI

はじめに：本稿の目的

本稿の目的は、高知県大川村における白滝鉱山閉山（1972年）を契機とした地域変遷と地域再生の取り組み実態を明らかにすることである。

1970年代前半に、国内のほとんどの非鉄金属鉱山は閉山をむかえ、立地地域・自治体は例外なく多くの困難を抱え込むこととなった。こうした全国各地に存在する鉱山閉山地域は、(1) 財政力不足に陥り地域振興の展望が見出せないといった地域経済上の困難、(2) 急激な人口減少、極度の高齢化・過疎化といった地域社会を維持していく上での困難、(3) 鉱滓や廃坑からの廃水対策にみられる環境被害と対策費用の存在等、多くの問題に直面し続けることとなった。こうした状況下で、市町村合併を選んだ地域自治体も少なくない。本稿は、多くの困難を抱えこんでいる鉱山閉山地域における地域再生に向けた政策体系の構築を展望し、そのための基礎作業として、当該地域の地域変遷と地域再生の取り組み実態を明らかにすることを企図している。

早明浦（さめうら）ダムが立地しているこ

とで有名な高知県大川村は、吉野川の上流部、高知県と愛媛県の県境に位置し、人口411人で高齢化率44.3%（2010年国勢調査）と、2013年時点で離島を除いてわが国で最も人口の少ない地方自治体である。大川村は自然エネルギーや山村留学などにいち早く取り組むなど、地域おこしの事例として1980年代後半から1990年代前半にかけて全国的にも注目され、いくつかの分析も行われている¹。しかしこれらの研究には、大川村において大きな役割を果たしていた白滝鉱山とその閉山に関連する記述は少ない。

そこで本稿では白滝鉱山とその閉山、さらにその後の白滝地区の開発について焦点を当てる。大川村と白滝鉱山の関係にはいくつかの特徴的な点が見られる。村全体が鉱山中心の地域構造ではなく、農林業も一定程度村内に並存していた点²、この二つの産業・文化がそれぞれ強固に存在し、さほど融合しなかった点、閉山後に鉱山跡地が村によって所有されている点などがそれである。これらは他の鉱山閉山地域には見られない特徴であり、興味深い。

聞き書き対象者である朝倉慧（あきら）氏

*島根大学法文学部法経学科

は2013年現在、大川村議会議長であり、かつて村職員として白滝地区の再開発を担当し、同地区にある各種施設を管理運営する大川村ふるさとむら公社の理事長を一時期務めた。

以下は、2011年8月25日に実施した朝倉氏からの聞き書き記録である。

生いたちのこと

私は1939（昭14）年、太平洋戦争が始まる二年前に、大川村内の下小南川（しもおみながわ）に生まれた。親父は大川村で村民に食料を運搬する仕事をしていた。もともと馬一頭でその仕事をしていたが、終戦後道路が良くなってからは馬車に切り替え、1951（昭26）年まで馬車引きをしていた。本来であればトラックに切り替えて輸送・運送の仕事をしたかったと思うが、経済的な事情や年齢が高かったこともあってか廃業した。農業で暮らすほどの土地もない中で、半農半労で生計を立てていた。

私の家は9人兄弟で、兄はひとり戦死、姉は小学校のときに亡くなって、実際は7人兄弟。自分はちょうど真ん中で育ってきた。典型的な田舎の貧乏を経験してきたと思う。今でも、貧乏を克服して生活してきたという自負があって、それを思うと何も怖いものはない。

小学校の記憶

小学校は川口という現在発電所³のある地域へ通った。いまは発電所しか残っていないが川口小中学校があった。ちょうど家のある集落から歩いて4km。毎日、子どもの足だから1時間以上かかったのではないか。ダムができる以前の吉野川沿いを一番前に並んでよく走っていた。当時の集落の住民は多く、毎朝30人くらいの子どもが列作って小学校へ行った。

この川口小学校には200人の児童生徒がいたと思う。校歌にも、友二百という一節があったので、やはり200人は在籍していたはず⁴。1学年で30人、20人という規模だった。これ以外にも村内には学区が3つあり、第三小学校として白滝、つまり鉱山地域の小学校があった。白滝の小学校は1960（昭35）当時には二学級編成だったろうから、だいたい小中学校合わせて600人程度おったと思うよ⁵。

小学校もおおらかだから、とにかく夏は川へ行って、子どもが溺れたら上級生が引っ張り出すといったことがよくあって、どんどん遊びに行った。秋は山に上がって木の実を取って食べ、まともに帰ることは無かった。カバンも、当然ランドセルもない。ふろしき包みで持ち運びして、傘もなければ何もない。教科書を持ち帰ったりしては濡れるから学校へ置きっぱなし。宿題の出たものだけはなんとか持って帰る。身を軽くして、山や川をまわって遊んで、日が暮れたら帰ってくる。

家の手伝いのこと

家の事情を考えると外で遊びまわってあればいいかという、そうはさせてくれなかった。家が貧しいということもあって、親父が帰ってくるまでには必ず風呂をわかしておくこと、これは絶対にやらなければいけない。風呂を焚く薪は自分で山から取って来ないといけない。炊事用の薪を使ってはいけない。風呂焚きはお前らの仕事だと言われ、弟と一緒にやる決まりだった。姉らは家事その他手伝い。中学校になってからは体育祭に備えての練習があるとき以外は、土・日は家の手伝い。中学の時には一人前にたいていの仕事はできるようになっていた。

白滝鉱山の記憶

覚えているのは、白滝地区に映画館があったこと。母が春には筍やゼンマイや蕨といった山菜を白滝地区に行商で売りに行って、わたしら子どもが何人かこれを一緒に背負って手伝う。白滝地区は山の上だから、2~3時間かけて登る。母がお得意さんを回る間、自分たち子どもらは映画を見る。

山菜を売り終わったら、生活用品をこの地域で買って帰る。当時、鉱山の購買部としてものすごいスーパーマーケットがあって(写真1)、とても安い。当時、(山の)下で行商に来た人たちから買う日用品と比べて半値。さらに新鮮な魚まである。山菜を売って得たお金で生活物資を買って帰る。日曜という日曜はほとんどこうしたことをしていた。白滝地区には子どものときからよく通っていたし、母の知り合いも多く、大川村のなかでもこの地域をよく知っているほうだと思う。母と同じような商売をしていた人はそれほど多くなかった。下の村から上の白滝地区に上がっていくには交通も不便だったから。バスが白滝地区に入り始めたのも1957(昭32)年くらいだったと思う。当時の白滝地区の生活物資は



写真1：購買部跡。手前に手すりのみが辛うじて確認できる(2011年8月、関撮影)。

索道で三島側⁶から野地峰という尾根を越えて運ばれてきていたから、道路事情が悪くても問題がなかったと思うよ。白滝地区の中学卒業生は高知市へ出て行くか、ほとんど三島にいった。通うということはできないが、土曜に白滝に帰って日曜に三島へ戻るということをしていたと思う。白滝地区は大川村内の地域ではあったが、山を越えた伊予三島とのつながりが強かった。

山の上にある白滝地区の学校とわれわれ大川村の下の学校とは、全くレベルが違っていたね。白滝地区には重役の子どもたちが東京から来る。レベルが高いとは思わなかったが、都会っ子で自然を知らないし全く文化が違う。100mを12秒台で走る大川村出身の同級生がいて、白滝地区に移って、その地区の新記録を作った。大川村出身者でも白滝地区で働く場合は通いではなく、白滝地区に住み込んで鉱山の人間になってしまっていた。

中学卒業後、山仕事へ

中学三年になった頃には、たいていの仕事の要領は覚えていた。自分の家には農地がなかったので、人の山を借りては焼畑をやり、ひえや麦を植え、そのあとにはミツマタを栽培し、最終的にはそこに木を植えて持ち主へ返すということをあちこちやっていた⁷。そのために山仕事はほとんど身に付いた。中学校を卒業した次の日には弁当を持って、山道具を下げて山仕事に行って賃金をもらった。林業労働者として働いた。最終的には山林の伐採や刈り付けまでをするようになった。

こうした山仕事を中心として、半農半労を1955(昭30)年から1959(昭34)年の20歳になるまで、親父と一緒に続けた。その頃には、どの仕事をして一人前の賃金をもらえるまでになっていて、ひとつの区切りをつけ

たくて、親に「高校にも行ってないから3年間だけ自分の勉強をしておきたい、大阪へ行く」と言った。それには、帰ってこなくなるからと猛反対された。家族だけでなく周囲の者も「お前が行って帰ってこなくなってしまうたら、この集落も村のいろいろなことも大変になる、村にいてほしい」と。

ちょうどその時期の中学卒業生は金の卵としてもてはやされていた。自分の弟も大阪に行っているし、行ったら戻ってこないと皆は思っただろう。「3年後には帰ってくるから」といってもなかなか信用してもらえなかった。

大阪での3年間

親父には一言いって、夜逃げ同然で最終のバスに乗り、大阪へ出た。一応、仕事先は決めて行った。大杉駅⁸で列車に乗って岡山まで行き、夜行寝台列車に乗って大阪には朝に着いた。就職先は40人くらいの町工場。20歳になって住み込みはきついとは思ったが、やる気はあった。3年経ったら帰るつもりなので、ただ大阪にいて遊んで帰りたくないという思いがあった。やはりその会社に必要な人間になって帰りたい。3年の間に何か身に付けたいと、鉄鋼加工の職人技術を、弟子入りして身につけようとした。3年で帰ると言ったら技術なんか教えてくれないから内緒にしていた。

工場の隅に誰も使わない機械があって、社長にそれを使わせてくれとお願いして、その機械でできる仕事をとってこようと思った。靴の裏に滑り止めの模様があって、当時は全て手で打って型をつけていた。その機械を使ってローラーで型を入れていくことができないかという発想が浮かんで挑戦してみることにした。自分の勘に頼ってすべて試行錯誤、1ヶ月くらい、工員が帰った後も、住み込みだからずっと作業を続けた。最終的には一つの小

さな型を作って、ゴムの大手の会社と契約できるまでにこぎつけた。その注文が増えて会社の経営にもいい影響が出た頃、ちょうど3年がたって村に帰る約束の時期になった。9月に帰るつもりで6月に社長に切り出したところ、それはいかん、今年の仕事は全て受けてしまっている、困ると言われた。技術は全部先輩に引き継いでいるといっても、なかなか認めてくれなかった。大川村に帰ってからも一ヶ月でいいから帰ってくれといわれたが、結局、大阪には行くことはなかった。その頃の大阪は、本当に音をたてて変わっている時期だった。ここ大阪で生きることができるのなら、日本の国どこにいても生きていけると実感して村へ帰った。林業に憧れていたので、林業をやろうと大川村に帰った。

村役場職員に

林業をやるはずが、とうとう役場に就職することになった。1963(昭38)年5月に臨時職員として村役場に入った。林業だったら自分で伐採もできる、搬出についてもかなりの自負を持っていた。ちょうどその頃はチェーンソーが導入され始めたころだったが、まだ自分は使ってはいなかった。それでも全て自分の手で大きな木でも倒せる自信があったから、絶対に林業をやろうと思っていた。

そんな自分に役場から声がかかったのは、それだけ当時の村には人材がいなかったんだと思う。自分は高校にも行ってないからダメと言ったが、積極的に挑戦する姿勢が認められたのかと思う。中学校卒業後、ものすごく働く、高校へは行ってないが通信教育のようなもので勉強はしていたことなどが役場にも伝わっていたのだろう。農業委員長に雇われて農業委員会書記をやったりもしていた。そんなこともあって、いったんやるとなったら、

しっかりやろうと考えた。

同級生は一人も高校へは行っていない。村全体では、ぼつぼつはいたと思うが、その場合も遠くの県外へ流れて行くことが多かった。高校に行って大川村に残る人間は少なかった。確かに、人材がどんどん減っていくという時期だった。

畜産振興への取り組み

役場での仕事は産業関係だった。入った日から、農業振興計画の策定をやった。基幹作物を決めて振興を図る、その当時は林業を基幹として、牛、栗、椎茸があった。自分は牛と栗を担当した。自分が役場に入った当時は、村内の農家に92頭の牛がおった。田も少ないながらあったために、堆肥をとるための牛で、農家に数頭といった規模⁹。運搬用の役牛としても使われていたが、やはりここは肉用牛として取り上げていこうと決めた。肥育も少しずつ始めていたところもあって、大川の黒牛は肉牛としても評価されていた。当時の農協の組合長は将来を見越して、良質の肉を生産する黒牛を推奨しようと考えていた。大川村では大量生産はできないぶん、質的には絶対に負けないようなものを作らないといけないと考える先輩たちがいた。そういう人たちから、お前に任せるよって言ってもらえるような人間に早くなりたい、そういう思いで一生懸命取り組んだ。

1972（昭47）年ころになって、農協の組合長が引退し、役場職員や農協の若手で一緒にやってきた仲間3人に村の畜産振興を任されることになった。まかり間違えば農協がつぶれるような、金額も書いていない白紙委任の小切手をもって買い付けに行った。せいぜい買うのは30頭程度だが、そんな小切手を持っていたこともあって、高知県大川村の職員は

不気味だぞと言われてたりしたものだ。農協のお手伝いであったが、買い付けの会場に公務員が出入りするのには珍しかったのだろう。1978（昭53）年から畜産センターを作り、完成したのが1980（昭55）年¹⁰。牛はどんどん増えて、県外へ毎年買い付けに行った。島根県や淡路島に買いに行き、放牧場で育成するという事業をしていた。

青年団活動と白滝地区との交流

普通の大川村民から見れば、白滝地区はどこか別の地域社会という意識があったと思う。ちょっと違うと感ずるのは、今思うと鉱山会社の管理があったということだろうか。全部会社を中心にものが動いている文化を感じた。文化活動、たとえば演芸大会でさえも鉱山会社からいろいろ支援を受けてやっている。やはりそういった雰囲気の違いは感じるがあった。

文化の違いがあるからこそ自分は若い頃から、青年・若者の交流を進めなくてはいけないと思っていた。白滝地区には野球チームもあって、なかには甲子園に出場した人もメンバーにいた。会社が支援していることもあって野球チームは強かった。そうした強いメンバーが多いので、チームから漏れる人に声をかけた、大川村のチームと一緒にやらないかと。村と白滝地区のチームとはレベルが違う。村のほうのチームは鉱山会社の社員ではなくて、白滝地区で商売をやっている人なんかを呼んで、野球チームを編成する。その後、鉱山会社も経営がしんどくなってきて、野球へ力を割くことができなくなってくると、大川村のほうから白滝地区のチームに試合を申し込む。やろうということになって、そのときには対等に戦うことができるチームができていたから、何度も試合をした。いまは水耕栽

培やはちきん地鶏の飼育をしている場所がかつて野球場で、そこでよく交流試合をした。そういう交流をどんどんやって地域間にある違和感を消していく努力をした。こうした活動は教育委員会に主催させたりしていたが、青年団活動としてやるのが中心で、1970年代初めに活発だった。

1965（昭40）年前後、役場職員として入った頃に、教育委員会や社会教育を担当する立場ではなかったが、青年団活動や社会教育に関わった。当時、1960（昭35）年の安保闘争などに青年団がかかわって、イデオロギーに走る組織になってしまい、高知県には青年団活動はほとんどなくなっていた。高知県の社会教育担当の先生方から、青年団活動の再建についての相談があって、自分も主催者に加わり、県内での再建に向けた集いをやったところ、800人が集まった。自分が26歳くらいのとき。大川村でも必ず青年団を作るからとその集いで言った。

当時は、白滝鉱山閉山もまだ先のことだったから青年も多かった。村内で呼びかけたら100人くらいが呼びかけに応え、三つの青年団の連合体として組織した。そのうちのひとつが白滝地区で、人数は断然多かった。連合組織の会長は私がやることになり、そのまま県に登録した。県でも副会長を2～3年やった。高知県青年団体連絡協議会を立ち上げて今も続けている。

こうして何か行事があったら、白滝地区の青年と交流しようという意識を大切にした。大川村の地区運動会や盆踊りにも白滝地区から来るし、白滝地区の演芸大会があって、そこにも大川村から行って、演劇を自分らで考えて演じる。おもしろいやつがいるぞということで、私は白滝地区の鉱山関係のいろいろな人と付き合い、同年輩や少し上の世代とも

知り合う機会があった。

閉山してからも、白滝地区の交流会をしようという声をかけて、みんなが集まってくれた。毎年5月3日にやっていて今も続けている。毎年200人くらいが集まる。

村営放牧場の造成と青年団活動

下小南川（しもおみながわ）という自分の生まれ育った集落の上に村営の放牧場を造成したが、その時に青年団を連れて行って一緒に作業をした。1968（昭43）年から指定を受け、1969（昭44）年、1970（昭45）と造成作業をした¹¹。山を切り開くといったことは本職に頼まなければいけないが、肥料や種まきは青年団でできる。お金を稼ぎたいと思う団員も多く、毎週土日に20人くらいは集まって作業をしてくれて、とても助かった。肥料をまくにしても放牧場まで運搬しなければいけないが、急傾斜の山で大変な作業だった。当時の私には、あまり役場職員という感覚がなかったこともあって公務どとか労災なんかも考えずに、なあに死にはしないと、勤務時間の5時を過ぎると上司には何も言わずに放牧場へ行って、夜中まで肥料などを運搬して、土日の青年団の作業の段取りをしていた。

そんなこともあって私はこれまで一度も青年団の名簿から消えたことがない。顧問として今も籍がある。青年の考え方をどうキャッチできるか、そして村づくりにどう活かしていくのか、若い人材をどう活かしていくかが一番大事なことだと思っている。

白滝鉱山の繁栄

村役場に就職した1963（昭38）年の白滝鉱山といえば、月産1万トンをゆうに生産していた時期¹²で、まだ黒字経営であったと思う。

最盛期の鉱山経営や地域の様子について直



写真 2：残存する数少ない社宅の建物（縦ノ木地区）（2011年8月、関撮影）。



写真 3：同じ社宅（別角度）（2011年8月、関撮影）。

接には触れる機会がなかったが、華やかな雰囲気は子どもの時代から見ている。白滝地区に2千人以上いたときには、高知県で一番華やかな地域。テレビも白滝地区の全世帯に普及したとあっていいくらい、しかも時期的にも普及が早かった。パチンコ屋もあるし、今でいうスーパーマーケットのような店が購買部としてある、昼夜ずっと上映している映画館もある、旅館も二軒、料亭のようなものまである。鉱山街が形成されていた¹³（写真2、3、4）。

1960（昭35）年くらいから1968（昭43）年ごろまでは、増産計画に基づいた経営で黒字を確保し続けていたが、その後急激に厳しい状況になったと聞いている。採掘のコストが嵩んでいくことと、銅の値段も下がったということらしい。それに加えて、硫化鉱だったので公害のもとになるといわれ、その対策が必要になってきたこともあって処理費用がかかってくる。海拔マイナス約200mまで掘ったらしいので採掘費用もかなりかかってきた。最後が正確にはマイナス256メートルまで達したと実際に掘った人からは聞いた。坑内の温度が30度以上、40度に近い温度になってくるから、従業員が続けて何時間も作業が出来



写真 4：白滝地区の中心部に残る会社幹部職員が主に利用したという公衆浴場建物跡（2011年8月、関撮影）。

ないという状況で、交代制を余儀なくされてコスト高になった¹⁴。

とうとう1971（昭46）年の12月1日に、当時の日本鉱業の取締役もやっていたと思うが、野村所長が閉山を発表した。白滝鉱山は1972（昭47）年の3月31日をもって閉山するという発表が出された。白滝鉱山は昭和20年代の後半から昭和30年代にかけて非常に華やかで、この山の中に約2千人の鉱山関係者があって、従業員も約600人近くおったんじゃないかな¹⁵。大川村が国勢調査で一番多かった4,114人の時（1960年）、そのときの半数が、この白滝地域の住民であった。

当時の村議会の約半数は鉱山関係者で占められていて、鉱山なしに村行政は成り立たなかったといっている。鉱山の最盛期は、1954（昭29）年前後に3年度ほど地方交付税の不交付税団体となった¹⁶。高知県の中でも財政的にも裕福な村で、さらに当時は林業も盛んなこともあって、労働賃金も県下で一番高いといわれていた。山の中にあつて不便さはものすごいものであつたが、住民生活をみると所得は県下でもトップクラス。高給取りも鉱山を中心に多かつた。

村役場と鉱山の関係、道路建設のこと

役場にいるものとしての感覚では、産業振興という視点で鉱山を見ていなかった¹⁷。あそこは別世界であるという位置づけ。いきなり閉山となつたときに村は慌てた。村は財源的には鉱山からの収入で潤っていたから¹⁸。それまでは、鉱山との関わりといえば、白滝地区から出てきている議員さんと議会でうまく政治的に付き合いをしていけば、なにも問題がなかつた。当時の村の振興はほとんどが道路計画と整備が中心だつた。当時の役場の職員が全て測量・設計して事業をやっていた。自分は産業振興担当であつたが昼は測量をして夜に図面に書く、建設担当と一緒にやる、最後には県に設計を持って行き事業を実施する。どこそこに道路を建設するから測量するとなると全てそこへ集中し、当初は測量技術も身につけていないが、最終的には覚えた。

当時、大物村長といわれた人がいて、道路村長とも言われた。県知事とのパイプもあつて県や国の補助金を取ってきて整備する。その裏負担を鉱山からの税収や、それがなくなつてからも村有林の売却で捻出して、鉱山閉山後もしばらくは続けていた。

閉山後1972（昭47）年から豪雨災害が頻発

して山があちこちで崩壊する。臨時職員を雇い、さらに自分のような違う部署の人間も含めて役場を総動員して復旧事業にあつたこともあつた。後に白滝鉱山跡地の再開発の担当課長になつたのも、測量、道路工事管理もできるからと任されたのだろう。

早明浦ダム建設¹⁹と白滝鉱山の衰退

今の村役場（写真5）の二代前の役場建物は、村の端から歩数で測つたといわれたくらい、細長い村の真ん中に作られていた²⁰。1962（昭37）年にそこから移転して、早明浦ダムの水没予定地にあえて新庁舎を建てた。現在ダムの底にある役場は、建設反対のための砦として作られた。実際には反対しきれなくなり、最終的にダムを認めたのは1967（昭42）年。建設のための調査実施を村が公的に認めた。結局、新庁舎は8年くらいしか使わずにダムの底に沈んだ。ダムの完成は1973（昭48）年だが、水没予定地からの移住・村からの転出は、村が建設を認めて以来1971（昭46）年ごろまで続いた。ダムで出て行く人がようやく落ち着いたと言つた矢先に白滝鉱山の閉山が発表された。ダム問題が決着するまでは鉱山があつて欲しかつたが意外に閉山が早かつた、



写真5：早明浦ダムのほりにある現在の大川村役場（奥）。手前は総合福祉センター（2011年8月、関撮影）。

という声は当時の村の幹部にもあった。ダムと閉山という2つのことから急激な人口減少に陥って、ショックが大きかった。ダム関連の移住が600名くらい、白滝鉱山も同じくらいの規模だったろうから、合わせて千人超というものすごい人口減少だった²¹。

早明浦ダムができていなければ、この辺りの吉野川は日本最高の川だったろうよ。激流もあるような変化の多いきれいな川だった。徳島から上がってくる鮎も立派で数も多く、朝ちょっと行けば手で押さえて取れた。

白滝鉱山の坑内の様子

閉山後、白滝鉱山を村が買収・所有した。この鉱山跡を再開発するために、坑内の様子

をいろいろな人に聞いている。坑道を測量した人も含めて多くの人たちから話を聞いているので、どこに坑道があって、どういう閉塞をしているかということはだいたいわかっている。谷坑は戦前に重点的に掘られていたところ、他にも源坑というのがあり、最後まで採掘をしていたのが白滝坑。下川という第二鉱山が離れたところにあって、そこからも鉱石を索道で運んで、いまは宿泊施設になっている「白滝の里」のちょうど上にあった選鉱場を集めていた(図1)。

白滝坑に最後に人が入った時には私も居合わせていた。当時の鉱山会社の専務や担当者、それから坑道の測量をしたという鉱山会社の人、トンネル関連の建設企業の技術者、他に

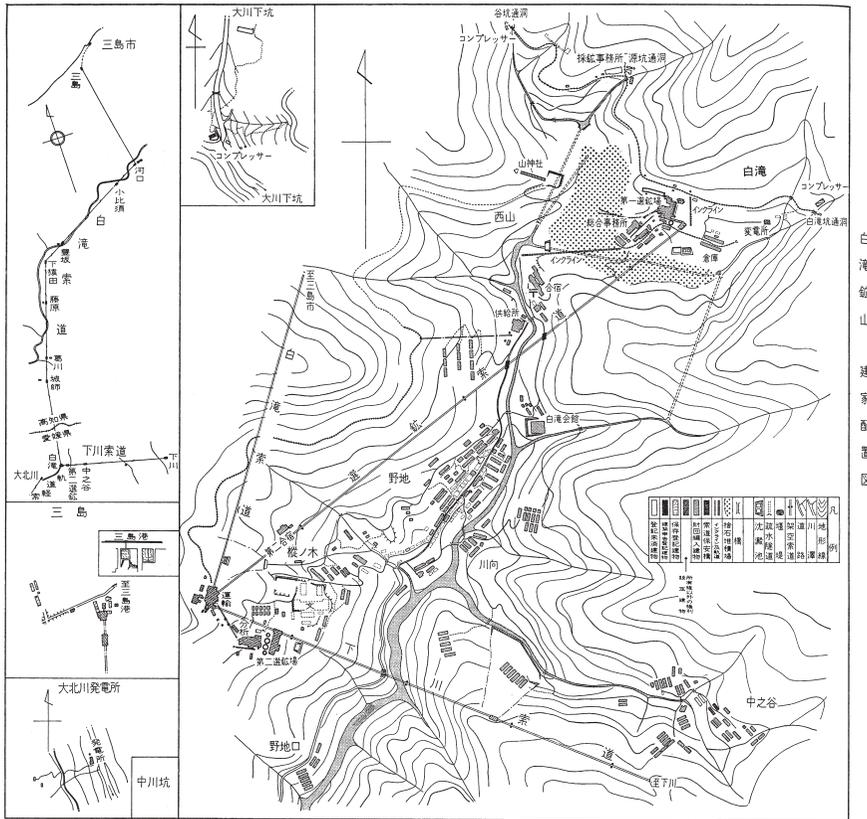


図1：白滝地区鉱山関連施設配置図
出所：大川村史追録、1984、巻末資料より転載

も再開発をする村の事業担当者連れて全部で十数人。この先に落盤があるというところを松の木で四方を補強して通る。

白滝坑は水平に1400m入り、立坑があって今度は縦に300m下りる。さらに300m水平に掘り進んでから斜めに800m下る(図2)。最後に採掘したのが37番坑で海拔マイナス116m。さらに掘ったと聞いているから海拔マイナス200mに達するのではないかという説明を受けた。実際に自分が中に入ったのは白滝坑口から1400m入ったところまで。とても広い空間、鉱石を下から運び上げるスペースがある。広いといったらなかった。そこは12~15°Cで気温が保たれているんじゃないかな。実際はそこから300m下りて採掘作業をする。そこにも広大な空間があると聞いた。白滝地区の地下には膨大な空洞があるということ。それも含めて鉱山跡地の使い方をどうするか、その権限は全部大川村にある。これは本当にすごいことだと思う。

白滝鉱山跡地買取の経緯

鉱山跡地を村が購入するまでは、なかなか難しい問題があった。坑口の所有権があれば地下の坑道の中にも入っていける。坑道が延びて愛媛県の地下にも入っているはずだが、それでも愛媛県の権限ではなく、大川村の所有。閉山した当初の5年は鉱山保安監督署と日本鉱業株式会社が管理人をおいて管理していた。坑内廃水の管理が中心。

跡地の買取は1972(昭47)年の閉山後、翌年だった。村が開発公社をつくって、県と共同で購入した。お金がないから県にも出してもらった²²。それをさらに、1979(昭54)に県が村へ売却している²³。これで全て大川村が所有することになった。当時の所長が本社の株主総会で口をすべらしてしまった、閉山になったらお世話になった地元・大川村に譲ると。これに反対の役員は多かつたらしい。当時の村長の政治力も大きかつたらしい。村がこの白滝鉱山の土地・坑道の中まで全て所有して

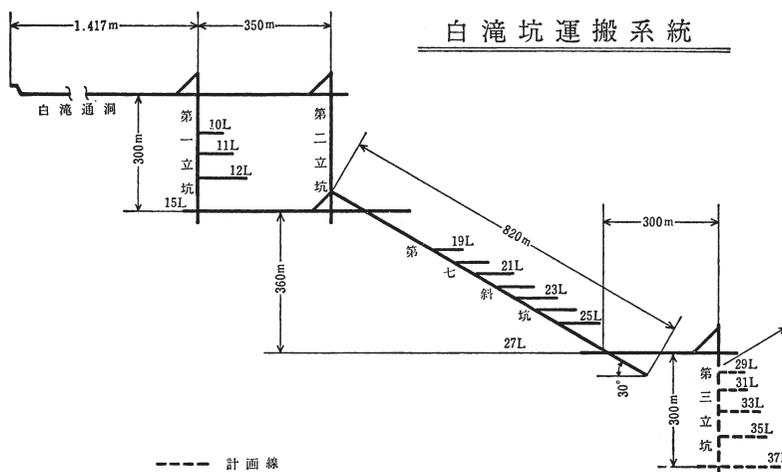


図2：白滝坑運搬系統図
出所：大川村史追録、1984、48頁より転載

いる。この大きな財産をどうするか、今も未活用の財産。全国的にも鉱山跡地を坑道含めて地元自治体が所有しているのはここ白滝鉱山だけ。

閉山前後の様子

閉山が決まったのは1971(昭46)年12月だった。落ち着きが全くない、自分はどうなるのかという先行き不安の雰囲気は白滝地区全体にあった。会社をやめるのか、転勤か以外の選択肢はない。当時、自分の同年輩の人や交流があった人らと話したが、非常に切羽詰った思いがあった。子どもをもつ親が最も悩んだのが、学校をどうしよう、子どもをどうしようということ。白滝にあった小学校は閉鎖して、下の学校に統合ということにはなったが、一人の児童も下の大川小学校にはいない。子どもを持った人は、転勤できない人もいたろうが、その場合は退職したと思う。退職して高知市に移住、子どものために職業も変えた、そういう人が多かった。単身の人は転勤で北海道にいったという話も聞いた。一番多いのは倉敷水島だろうか²⁴。

白滝地区や大川村に住み続けたいという声はなかったね。もうほんの十数人、3~4戸残ったが、高齢者が残っただけだった。村の対応としては公営住宅を建てたりもした²⁵。

白滝鉱山閉山をめぐる役場の動き

白滝鉱山のことは役場のなかではほとんど関係なかった。役場としての仕事は、福祉・衛生・医療・保健が中心。国民健康保険などは、(鉱山会社の健康保険だから)鉱山の従業員であれば関係してこない。

村議会をはじめ役場内に白滝鉱山閉山対策協議会を立ち上げて対応を考えたが²⁶、結果的に実現したものはひとつもない。空想的にも

のを考えてしまっていて現実性がなかった。国民休暇村、国民宿舎の設立、養豚を始めるなどが挙げられたが、ひとつも現実しなかった。早明浦ダムも一緒。ダム対策として構想が打ち出されてもひとつもあとに残るものがなかった。

養豚については汚水処理関係の問題があって無理ではないかということになった。鉱山からの廃水問題があった²⁷うえに、畜産公害があつては地域の再生にならない。当時完成間近だった早明浦ダムもあって、進出する業者がなかった。香川県にとってダムは飲料水の供給源だから。他にも鉱山として掘り出した鉱石を何かに使うことができないかも検討したが、ここで産出される石は骨材として利用するにもやわらかくてだめだということになった²⁸。結論としては、白滝鉱山閉山後の地域には何もできない。それでも閉山当時はまだ林業の将来への期待を持っていた。

また、1972(昭47)年から立て続けに災害に見舞われたことが大きかった²⁹。1972(昭47)年、1975(昭50)年、1976(昭51)年と未曾有の被害で死者まで出した³⁰。今後は大川村に人が住めなくなるのではないかというくらい大きな被害だった。そのために白滝鉱山の閉山とその後の白滝地区のことは放置されてしまった。

白滝鉱山跡地の開発構想

その後、一段落してから白滝地区の活用を本格的に考えていかなきゃならないということで、1980(昭55)年、私が40歳のときに担当課長に任命された。そのとき川村計廣(かずひろ)村長から、お前が白滝地区、鉱山跡地の開発を考える担当になれという命を受けて、まずは村の総合開発計画をたて、その後、白滝鉱山跡地をどうするかを考え、閉山後10

年経った1983(昭58)年に計画をたてること
ができた³¹。手書きの図面を引いた。今も毎年
1,500人が集う謝肉祭もこの年から取り組み始
めた。

村が再生するためには白滝鉱山にかつて
2,000人もの人が住んでいたということを財産
にして、かつて住んでいたその人たちとの交
流もしながら地域振興を図るのが大川村の生
き方である当時の村長が言っていて、それ
に賛同して、片腕になってやりますと言っ
たら、両手になってやるようにと言われた。鉱
山跡地をどう開発して村の再生を図っていく
のか、これからの方向として絶対必要な理念
だと確信していた。

都市住民との交流をどう図っていくのか、
その拠点としての白滝地区の開発をやらねば
ならないという思いだったね。「ふるさと」と
いう言葉にこだわって、大川村ふるさとむら
公社も設立した。

白滝小中学校校舎の活用

大川村ふるさとむら公社は1985(昭60)年
に設立した³²。公社が今現在も運営している宿
泊施設は、もとは1953(昭28)年に改築した
白滝小中学校の校舎の骨格そのものを残して
いて、板なんかもその当時のものを使ってい
る³³。その改築の時の建材は全て、村有林から
採材して作った木材を使用している。柱のヒ
ノキも含めて全て村有林から。

この白滝小中学校が1972(昭47)年に閉校
になった。それからの白滝地区はまるで廃墟
状態だった。校舎は取り壊す予定になってい
た。発注もすでにしていたと聞いている。助
役が決めてしまったことだったが、ちょっと
待ってくれ、あの校舎を壊したらいけない、
使わなければダメだと言ったら、そんな無駄
なことは出来ないと言いつ返された。村長も何

か使えるいい制度はあるのかと。制度はあっ
た。林業構造改善事業を活用すれば、宿泊施
設に転換することが可能であった。

そうした制度の利用や宿泊施設への転換は
重要だと思いつながらも、やはり今後も教育に
関連してこの建物を活かしたいという思いが
強かった。校舎に残る落書きを見て、どうし
ても保存し、当時の気持ちを残したいという
思いだった。現在の山村留学事業としての施
設利用もそういう思いからだ。

1983年(昭58)年に計画を最終につめてい
き、宿泊施設にするとということで取り壊しは
中止になったが、施設整備のための補助金適
用をどうするかを考えながら残業をしていた。
夜、家へ帰ってテレビをつけたら、11時の
ニュースで文部省(当時)が廃校利用で自然
教育推進施設の整備を検討しているというこ
とだった。次年度の調査事業を概算要求する
というニュース。翌朝さっそく村長に、この
制度で文部省に申請しようという話をして、
教育長にも話をした。村長はそのまますぐに
東京へ行った。文部省に行ってみたら、この
事業はまだほんの調査の段階でどうなるかわ
からないと。村長は文部省の担当課長に、大
川村の書類を机の一番上に置いてくれと願
いをして帰ってきた。その後に自分も何度か
文部省に行ったが、担当課長が変わってもい
つもそこにちゃんと大川村の書類が置いてあ
った。そして結局は、1985(昭60)年の概算要
求に入れられ、木造校舎で第一号の事業認定
を受けることになった。

他の施設整備も含め全て、白滝地区の開発
は村の実施事業だったが、その財源は村の財
政はもちろん、個別の施設ごとに、国や県の
補助金制度をうまく活用して確保した。

地域振興の理念と取り組み

自然教育ということを基軸にすえて、文部省（当時）の指定を受けられなくてもやろうと考えた。自然教育とともに、産業的には地域に賦存する自然エネルギーの活用、バイオマスもやろうと考えていた。木質ペレットで水耕栽培のための保温をし、ボイラーは「白滝の里」の宿泊施設にも入れた。

他にも、いまは災害でつぶれてしまったが坑道の地熱を引き出して椎茸栽培をする。小水力発電は今も続けられている³⁴。風力発電も考えて調査をしたら条件がよくなかった。気流が悪くて安定した風がない、吹く方向がわからないと。

白滝地区の再開発は全体で29億円の計画を立てた³⁵。1988（昭63）年の林業構造改善事業で木質燃料のプラントの設置までは認定されていた。稼動には電力が必要だということになって送電線の容量が十分でない。これを入れ替えるために2,000万円がかかるが、電力会社からそれを負担するように村へ話があった。結局それがもとで事業全体がボツになってしまった。いま高知県橋原町が自然エネルギーで注目を浴びているけれども、自分も何度か講演に呼ばれたこともあるし、あちらからも視察にはよく来ていた。これを事業として確立できなかつたのは、今思うと本当にもったいないことだ。

大川村ふるさとむら公社でのこと

1980（昭55）年に担当課長になったのは40代前半、その後1983（昭58）年には他の仕事は持たずに企画担当参事となった。1985（昭60）年に大川村ふるさとむら公社設立と同時に専務理事になり、1993（平5）年まで公社にいた。1989（平1）年からは行政職からも離れ

て公社の仕事に専念して働いた。

宿泊施設がオープンしたのが1986（昭61）年4月1日。それから6月末まで、自宅には一度も帰らずに、昼夜なく仕事をした。皆がよく持つなと言っていたが、やろうとすれば持つものだ。ずっと来客対応。そしてこの施設の経営。経理は任せるとしても資金繰りなどの大きなところに責任をもつ。ただ役場からお金をもらって運営するだけではない、ある程度の自立も考えながらやっていかなければならない。

視察も含めて多くの来客があって宿泊もする。全部自分で対応するほかない。夕食は必ずバーベキュー。今のように設備も整っていないからテントを張ってやる。そのテントを放って置いたら吹き飛ばす、食事のあとを放置したらタヌキが来る。食事会の後は自分ひとりになるのが夜中になるのが片付けをしななければいけない。宿直室があってずっと宿直をやった。当時はまだ周辺は寂しいものだった。誰もいなくなったときには、風の音だけで何やら出てきそうな雰囲気。まあ、何が出ようとかまわないじゃないかと、仕事をやった。

公社は、臨時職員を入れて27名にまでになったが³⁶、今は10名くらいになってしまっている。1993（平5）年に教育長となって公社を退くことになった。

白滝地区での取り組みの成果

1985（昭60）年に村の人口は751人、1990年の国勢調査では758人で、7人の人口増加。農山村で増加するなんてことは全国でもほとんどみられないということで、当時の国土庁だったか、長官表彰を受けることができた。白滝鉱山跡地の開発をやって、ふるさとむら公社の活動も効果的だった。その当時、公社で採用した職員を中心に結婚ラッシュが続き、

12組の結婚があった。NHKが全国放送で特集したのは1988（昭63）年か1989（平1）年。その頃はIターンで公社に来た若者が村内の人と結婚する、それ以外にも、農協、役場、森林組合と1年で約10組の結婚式で祝辞を言う、忙しかった。公社の職員の結婚式には当時の県知事まで出席したこともあった。

視察に来た自治体職員や幹部に対応して話をして、今度は議会に視察させると議員をよこす、さらに住民にも知らせたいと講演で呼ばれたりということが多く、全国各地をよく回った。1985（昭60）年から1992（平4）年の頃。地域おこしで有名になった徳島県上勝町の町長も大川村には3回視察に来ている。

大川村の今後

今では日本一小さな村で411人。地理的にも不利な山奥で人口の減少率も高い。われわれより上の世代の人間には、ここまで人口が減って高齢化が進んでいても鉱山や林業があった頃の裕福な感覚というのはいまだに残っていて、なごりはある。私の年代より下は危機感が非常に強いが、上の世代は「村は、なに、しんどいことはないよ」という感覚がある。現役世代の言葉を重要視して村政に反映していかないと村は存続しない。村が自立していくためには福祉だけではだめで、やはりそこに産業・経済が興らないといけない。村の財源の許す限り、国や県の制度をうまく活用しながら、動かしていかないといけない。

四国のご真ん中、四国の水がめ（早明浦ダム）の最上流に、これだけの広大な鉱山跡地があるということは本当に大きな財産。しかも所有権が村にある。場合によっては国を動かすことも可能なくらいのものだ。大川村の主張として、少なくとも県知事を動かすくらいゆるぎないものを構想していけば、この財

産を残し、しっかり活用していくことができる。その知恵は今の太川村から出すことが可能だと思う。地方自治法や憲法では、太川村411人の村も、東京都も同等。強い権限を持っていると言っている。鉱山跡地という大きな財産をいかしながら新しい方向での村づくりは可能だ。

まとめにかえて

以上、朝倉氏の聞き書きから、白滝地区を中心として太川村の地域変遷と地域再生の取り組みの理念や実態が明らかにされた。白滝鉱山の最盛期から閉山前後に至るまでの地域の様子、それを取り巻く太川村行政や太川村民（青年）と白滝地区との交流などが興味深い。

また、閉山後の白滝地区の開発事業についても明らかにされた。1980年代から1990年代前半に見られる白滝地区を中心にした太川村の地域再生について鈴木（1993）は、(1) 観光・リゾート開発に走らず農林業といった第1次産業を基軸に据えている点、(2) 山村留学制度といった教育を重視した点、(3) 若者の定住を意図してU・Iターン者を重視した点を挙げて高く評価し、それを可能にしたふるさとむら公社の存在に注目している。本稿の中でも白滝地区での畜産振興や農林業を基軸に据えた産業振興策の展開、旧小中学校校舎を活用した経緯、公社職員をはじめとした結婚ラッシュのことなどが語られており、これら指摘を裏付けるものである。

最後に、他の鉱山閉山地域も念頭に置きながら、太川村における鉱山閉山地域再生の取り組みについて、いくつか指摘しておこう。

第一に指摘できることは、白滝地区の開発に見られる地域再生の理念である。すでに鈴木（1993、42頁）によって指摘されていたよ

うに、観光・リゾートに走らずに、農林業や畜産振興にぶれることなく軸足を置いている点、教育を重視している点が注目される。現在も白滝地区においては、はちきん地鶏をはじめとした第一次産業の立地が見られる。全国の鉱山閉山地域においては観光レジャーを中心とした施設が立地することがまみられるが、安易にこうした方向性に走らずに第一次産業を重視し続けたことが、逆に謝肉祭といった交流人口の増加やU・Iターン者の獲得につながったとあってよい。また、教育を重視して山村留学を受け入れている点も交流人口の増加へとつながっている。

さらに注目すべきは、白滝鉱山という存在とそこから去った人々への思い、これらを活かすことへのこだわりである。

「白滝鉱山にかつて2,000人もの人が住んでいたということを財産にして、かつて住んでいたその人たちとの交流もしながら地域振興を図る」、「閉山してからも、白滝地区の交流会をしようといって声をかけて、みんなが集まってくれた。毎年5月3日にやっていて今も続いている。毎年200人くらいが集まる。」、「やはり今後も教育に関連してこの建物を活かしたいという思いが強かった。校舎に残る落書きを見て、どうしても保存し、当時の気持ちを残したいという思いだった。」といった証言に見られるように、かつての姿への単なるノスタルジーではなく、鉱山地域に住んでいた人々が白滝地区に対して抱いている思いを重視し、そうした理念に基づく白滝地区の開発事業であったがゆえに、着実な成果が生み出せたとあってよい。

第二に、鉱山会社からの跡地の買取りが実現したことの意味の大きさである。朝倉氏が述べるように、鉱山跡地をここまで広大な形で地元自治体が所有することは極めて稀な事例

である。多くの立地自治体で見られる事例は、観光関連施設としての利用などの一部に限って企業側が土地等を譲渡するといった程度であり、鉱山会社による閉山後の地域振興への協力は極めて不十分であるのが一般的である。とくに広大な施設や用地は企業所有のまま未活用地として放置され、なかには重要な産業・文化遺産が未管理状態となり放置されるケースも多い。これらのことは、立地地域の衰退に拍車をかける大きな要因となっている。

他方、白滝地区については、鉱山関連の広大な跡地が閉山直後に大川村の所有下に置かれ、その後の交流施設としての整備・活用、第一次産業の立地などが実現している。こうした跡地利用をはじめとした鉱山会社による協力は、閉山後の地域の振興を大きく左右する重要な要素であり、閉山後の地域に対する企業の社会的責任を考える上で重要な視点といえる。

第三に、中央政府や県による包括的な支援策の欠如である。鉱山跡地の利用の余地がいまだにあって活用しきれていないこと、実現できなかった構想内容があったことなどが本稿で明らかになった。こうした実態の背景には、例えば「他の施設整備も含め全て、白滝地区の開発は村の実施事業だったが、その財源は村の財政はもちろん、個別の施設ごとに、国や県の補助金制度をうまく活用して確保した。」といったことから伺えるように、白滝地区の開発事業の財源は県や国からの補助金制度をつぎはぎして捻出したものであったといえる。特別措置法がなかったことが典型であるが、炭鉱地域と比較しても中央政府による非鉄金属鉱山の閉山対応は極めて限定的で不十分であったといえよう。

以上、取り組み・政策理念、鉱山会社の協力のあり方、県や中央政府による支援策のあ

り方について指摘した。今後、他の閉山地域の変遷とも比較しながら、鉱山閉山地域における地域再生に向けた政策体系の考察を深めていく必要がある。

謝辞：聞き書きに応じ、貴重な証言をしてくださった朝倉慧氏に心よりお礼申し上げます。また、記録の整理に協力してくれた芝木達也氏（法文学部4回生）にお礼申し上げます。

付記：本稿は科学研究費補助金若手（B）「鉱山閉山地域における地域再生と環境再生に向けた政策研究」（研究課題番号23730279、研究代表者：関耕平、2011-2012年度）による成果の一部である。

注

¹ 吉富（1987）、鈴木（1991）（1993）、増淵（1992）、平野（1993）、福田（1993）など。

² 鈴木（1993）によれば、1955年時点で村内総戸数879戸の職業別内訳は農業・林業が349戸、鉱業400戸であり、就業人口では農業770人（47.2%）、林業112人（6.9%）、鉱業500人（30.6%）となっている。

³ 上小南川にある高敷水力発電所のこと。同発電所の沿革は、大川村史、1962、429頁。

⁴ 『大川村史』によれば、1947（昭22）に川口小学校に中学校を併置したとある（445頁）。また、時期は異なるが、1962（昭37）年3月末の川口小学校在籍実数は6学級145名（教員8名）、同中学校3学級85名（教員6名）となっている（461-462頁）。

⁵ 1962（昭37）年3月末の白滝小学校は12学級365名（教員14名）、同中学校には6学級

218名（教員10名）が在籍した（大川村史、1962、461-462頁）。

⁶ 現在の伊予三島のこと。伊予三島には精錬所があり、野地峰を越えて通された索道によって鉱石が運搬された。この索道は生活物資の運搬も担った。1915（大4）年から1918（大7）年に大川村周辺における煙害の被害賠償の支出がかさんだことから、鉱石を伊予三島港に運んで精錬することにし、索道を建設した。「当時鉱山としては、経営上かかる煙害の賠償は永久に支出できないことを悟り、伊予三島港との間に二十一軒（km）の架空索道を完成し、鉱石・資材・生活必需品等の運搬を開始（ママ）した。大正八年久原鉱業株式会社の手に移り精錬を廃し…」（大川村史、1962、485頁、（）内筆者）とある。白滝索道（白滝～下猿田）完成は1922（大11）年とされる（大川村史、1962、490頁）。

⁷ 「（高知）県の三極（みつまた）は明治二十年頃、県勧業課が…山間部農村の特産物として奨励したようである。本村の一般農家約三百戸の現金収入の源泉となり、家庭経済の上から見ても、もっとも重要であったが、明治の末期に至って、連作の害から嫌地（ママ）現象があらわれ、収穫が減少したため、現在では漸次杉・檜等の植林に移行しつつある。」（大川村史、1962、476頁、（）内筆者）。

⁸ 土讃線大杉駅のこと。

⁹ 「昭和四年頃まで、村内においては雑穀、いも類を主とした自給農家にとって、和牛の飼育は田作りにとって欠かすことのできない役割をもち、又自給肥料として土作りの大きな役割を担っていた。…殆んどの農家には二、三頭の牛が飼育されていた。」（大川村史追録、1984、84頁）。

¹⁰ 「昭和五十五年七月白滝鉱山の跡地、中ノ谷地区に総工費一億二〇〇万円余を投じて、常

時一五〇頭を飼育できる大川村肉用牛肥育センター（畜産センター）が建設され、…施設は畜舎三棟のほか、…放牧地三・六ヘクタール、農地六三〇アールをもつ。」（大川村史追録、1984、85頁）。

¹¹ 「村では昭和四十六（1971）年四月民有地一九ヘクタールを借地して村営放牧場を造成し、毎年四月上旬より十一月上旬まで飼育農家から八〇頭くらいの預託を受けて放牧している。現在の借地は一六ヘクタールである。」（大川村史追録、1984、88頁、（）内筆者）。

¹² 「昭和三十六（1961）年には…黒字操業を安定確実にするために…月産一万トンの出鉱を実施する。」（大川村史追録、1984、44頁、（）内筆者）。

¹³ 「明治初期には、所在の朝谷部落は4戸に過ぎない寂しい不便な集落であったが、今は戸数四一七戸、居住者一、九六〇人、巡査駐在所一、白滝郵便局（無配集）一、となっている。（昭和三七年四月調）…今から四十年前と比較すると、戸数や居住人数は現在では約倍となっている。当村はかつては県下で土佐のチベットといわれていた山峡であったが、漸次鉱山町を形成し、現在では映画は週二回上映され、テレビは全戸数の九〇%まで普及し、電話も各所に通じて文化も発達し、他に劣らない活況を呈するに至っている。」（大川村史、1962、480-481頁）。

¹⁴ 「鉱脈を求めて掘り続けて最深部で海面下一一六メートル、遠い採掘現場へは往復四時間もかかり、地下の温度は三〇度近いという悪条件のもとでの採掘であり、生産も伸びなやんでいた…硫黄の原料となる硫化鉄鋼を主に生産していた白滝鉱業所にとって、石油から安価な硫黄が採れるため、コストの高い硫化鉄鋼は次第に敬遠されるようになった」（大川村史追録、1984、50-51頁）。

¹⁵ 白滝鉱山の従業員の推移を見ると、1949（昭24）年10月に671名、その時以外のピークは1966（昭31）3月および9月の570名である（大川村史追録、1984、128頁）。

¹⁶ 『高知県統計書』（各年度版）によると、大川村は1952（昭27）年度から3年度連続、さらに1956年度も普通交付税の不交付団体となっている。1957年度の普通交付税は189千円、58年度は176千円、59年度は1,029千円となっている。

¹⁷ 例えば、1969（昭44）年度から1973（昭48）年度までの『大川村総合振興計画』には鉱業はわずか6行程度の記述に止まり、他の項目と比較しても少ない。その内容は「県の策定した総合計画にのっとり、地下資源の開発…への施策を強力に推進するよう、国、県へ要望する。」（45頁）というものである。

¹⁸ 一般に鉱山立地自治体において、固定資産税のほか、市町村税として採掘量に応じて鉱産税が税収として入ることとなる。「鉱山からの固定資産税や鉱山（ママ）税などを含めて年間六百万円などの歳入見通しも消えることになり、自主財源の乏しい村にとっても痛手は大きいわけだ。」（1971年12月3日付高知新聞。引用は、大川村史追録、1984、51頁）。

¹⁹ 早明浦ダムの建設の経緯と詳細については、『大川村史追録』を参照。

²⁰ 広範に点在する集落を擁する大川村ゆえ「村役場の位置は村会ごとに話題となり、議事に対する紛争がたえなかった。」（大川村史1962、360頁）。

²¹ 国勢調査の結果を見ると、大川村の人口は、1965年は3,212名で、1970年に1,900名、1975年に933名となっている。

²² 買受人が高知県および大川村土地開発公社、売却人が日本鉱業株式会社、面積は350万4,200.59m²、売買代金は9,500万円で、県と

公社が折半している（大川村史追録、1984、168頁、「白滝鉱山跡地売買契約書」）。

²³ 売買代金は2,443万7,245円である（大川村史追録、1984、170頁、「県有財産売買契約書」）。

²⁴ 「昭和四十七年一月には退職者八三名、配置転換五四名（内北海道豊羽鉱業所一七、秋田県沢内鉱業所四、神奈川県倉見工場一一、岡山県水島製油所一六、富山県三日市精錬所六）が決まり、いよいよ引っ越しがはじまった。」（大川村史追録、1984、53頁）。

²⁵ 閉山直前に白滝地区は大火に見舞われ、多くの住民が焼け出された。その「被災者の意向調査が行われた。…県営住宅入居希望者三一件、村内に住居を希望する者六件、村営住宅に入居希望者四件…であった。」（大川村史追録、1984、54頁）。また、公営住宅の造成も試みられたが、台風被害により完成が1973年4月と遅れたため、希望者も入居することなく転出して行った。「(1972年) 三月三日白滝鉱業所で閉山式が行われ、三月三十一日には鉱業所が閉鎖されて長い鉱山の歴史に終止符が打たれた。村の行った調査では、残村希望者は僅かに十三世帯であった。」（大川村史追録、1984、55頁、()内筆者）。

²⁶ 「(1971年) 十二月七日議員協議会が開かれ、県の白滝鉱山閉山対策協議会の係員も出席して対策を協議したが、具体的な対策がでようはずがなく、とりあえず執行部、議会合同の白滝鉱山閉山対策協議会を結成して、村、県一体となって打開策を講じることとした。」（大川村史追録、1984、52頁、()内筆者）。

²⁷ 「(1957年) 白滝鉱業所は廃液の処理について嶺北漁協組（ママ）から強い抗議を受け、補償問題にまで発展した。…汚染がひどくなり、しばしば吉野川がどす黒くにごるようになって地元民の関心を集めていた…魚類への

影響を恐れた漁協組が早急に対策をたてるよう白滝鉱業所に要望した」（大川村史追録、1984、44頁）。

²⁸ 「閉山後の地元振興策には隘路が多すぎた。膨大な量の廃石については、軟石が多くてコンクリート骨材にむかないばかりか、路盤用碎石や舗装ダストとしても適さず、住宅用地の埋め立てには利用できても採算が合うものかどうか保証はない。林業経営にしても造林地そのものが少ない。養豚はし尿公害を伴う。等々。」（大川村史追録、1984、52-53頁）。

²⁹ 1972（昭47）10月20日発行の「広報おおかわ」（第133号）には「9月8日の記録的集中豪雨により死者3名、負傷者6名と痛ましい事故が発生し、罹災者63名を出した。全壊住宅7戸、半壊5戸、1部（ママ）損壊4戸、また、公共施設、山林ほう壊等被害総額3億2百万円という大被害をもたらした。」とある（写真集おおかわ、1984、110頁、()内筆者）。

³⁰ 「(1975年) 八月一七日台風五号村内全域に大災害をもたらす/八月二四日災害救助法適用を受ける」（大川村史追録、1984、189頁、()内筆者）。

³¹ 『地域産業開発計画書』のこと。詳細は増渕（1992）、吉富（1987）および鈴木（1993）。「同計画書に盛り込まれた諸施設は、①木質等固形燃料プラントの設置、②小経木、廃材等の燃料化、③シイタケ等の不時栽培施設の設置、④水気耕農法の導入による施設園芸団地、⑤家畜排泄物処理施設の整備充実による良質コンポスト化、⑥大川の黒牛のパーベキュー広場、⑦教育用諸施設などであるが、これらの施設は、その後数年間にほとんど実現している。」（鈴木、1993、28-29頁）。

³² 大川村ふるさとむら公社の設立経緯および詳細は吉富（1987）参照。

³³ 「昭和二十七年夏季の暴風のため被害を受け

たので、翌二十八年三月校舎を改築す。」(大川村史、1962、456頁)。

³⁴ 白滝小水力発電所のこと。吉野川水系朝谷川に設置され、最大出力60kW、最大使用水量0.13m³/秒、有効落差65.7m、CO₂排出削減量は年間213トンで、電力は大川村ふるさとむら公社の水気耕栽培施設で利用されている(2011年8月、設置看板より筆者が確認)。

³⁵ 「この白滝地区には昭和53(1978)年から平成元(1989)年までに30に及ぶ事業が導入され、総額23億円の事業費により、構想は次々と実現の運びとなる。」(増淵、1992、63頁、()内筆者)。

³⁶ 1991年のふるさと村公社の職員数は22名(他に臨時職員3名)となっている(増淵、1992、64頁)。

・参考文献

大川村(1969)『大川村総合振興計画：自昭44年度至昭和48年度』大川村

大川村史追録編さん委員会(1984)『写真集お

83-114頁。

おかわ：大川村史追録 別冊』大川村。

大川村史追録編さん委員会(1984)『大川村史追録』大川村。

大川村史編纂委員会(1962)『大川村史』大川村。

高知県『高知県統計書』(各年度版)

鈴木文熹(1991)「高知県に見る山村問題(3)：大川村における地域創造の軌跡」『社会科学論集』61号、47-98頁。

鈴木文熹(1993)「高知県に見る山村問題(5)：大川村の地域創造にみる住民自治の歴史状況」『社会科学論集』65号、1-21頁。

福田善乙(1993)「人口定住の条件と地域再生」『社会科学論集』65号、1-20頁。

平野純一(1993)「地域が自立する(19)過疎の村で産業を興すには：高知県大川村」『エコノミスト』第71巻36号、104-110頁。

増淵隆一(1992)「超過疎地域からの脱却をめざして：高知県大川村」『農村計画学会誌』第10巻4号、60-67頁。

吉富啓一郎(1987)「大川村における地域振興と住民の主体形成」『教育実践研究』第2号、